

みんなのみどり

通刊 19号

2012. 10. 30

発行 みどり・山梨

事務所:山梨県甲府市古府中町984-2

(川村方)

電話:055-252-0288

FAX:0553-33-7620

URL:<http://www.midoriyamanashi.com>

E-mail:kankyo@midoriyamanashi.com

市議会議員選挙で再選を果たして

野沢今朝幸

今回も、「みどり・山梨」のメンバーをはじめ、多くの仲間の支援によって市議会議員選挙を勝ち抜くことができました。本当に感謝申し上げます。

前回の経験を踏まえて、早めに選挙準備にとりかかりましたが、倉嶋さんの市長選立候補も絡んで、「おっつけ大工」のような形で間に合わせる場面が多々あり、支援者の皆さんには必要以上にご負担をおかけし、済みませんでした。

さて、今回の市長選の結果ですが、投票率が前回よりも3%以上低かったにもかかわらず、私の得票数は1,618票と、前回の1,100票を518票上回りました。現職で立候補したどの候補よりも得票数を伸ばしました。次に伸ばした北嶋さんが280票の伸びですから、ダントツで票を上積みしたと言えます。

ところで、自分で言うのも何ですが、今回のすばらしい選挙結果の勝因はどこにあったのか？

まず、第一に、議会という「言論の府」で、もっともその機能を発揮できる「一般質問（場合によっては「代表質問」）をこの4年間欠かさず行った点にあると思います。市民の立場から、毎回荻野市長の政策・施策そして予算・条例をしっかりチェックしてきたところを、多くの市民が評価してくれたのではないではないか。何人もの私の知らない方々が、「野沢さん、応援しているよ。議会で頑張っているもの。」と言って、選挙中支援の意思を實際示してくれました。

第二に、今回の選挙の争点が「多機能アリーナ建設」であったことを考えると、「多機能アリーナ建設」に終始一貫して明確に反対してきたことも、支援者を大幅に増やす要因となったと思います。「多機能アリーナ建設」の問題点を、議会で最初に一般質問で取り上げ、そして多くの市民の意向を汲んで「住民投票でその可否を決すべし」と提案し、更に、市長選をにらんで荻野市長に「多機能アリーナ建設の凍結」を迫りました。

ほぼ、3年間にわたる荻野市長との闘いであったが、この間に、「多機能アリーナ建設」に反対する市民運動は大きく盛り上がり、多くの市民と、私自身連帯できたことが、今回の私への支持層となったと思われる。

第三に、選挙用リーフレット（議会報告を中心とした内部資料）を広く市民に配布したことが、すばらしい選挙結果を生んだ要因となったのではないかと思います。どの候補もリーフレットやちらしを市民に配布していましたが、私ほど広く市民に配布した候補はないと思

います。15,000部印刷し、12,000部配布しました。ただ、先にも触れたように、倉嶋さんの市長選とも絡み合って、「みどり・山梨」の仲間に補ってはもらったものの、私自身、配布する時間が十分とれず、不十分な対応となった点は、反省として残ります。

それと、リーフレットに「私の政治信条」や「仲間からのメッセージ」を載せることによって、わたしという人間をより深く理解していただいたことも、わたしへの支持を広げる要因となったように思われます。さらに、ポスターの「ストップ！！アリーナ」「生活優先の市政に」というキャッチフレーズも私を印象づけるのに、強いインパクトがあったようです。多くの支持者からそんなことをうかがわせる声が届きましたので。

先回同様、私の選挙は、ほとんどの立候補者がそうであるような、地元擁立型の選挙ではありません。また、共産党や公明党のような、政党支持者型の選挙でもありません。それだけに、本当のところ、1,618人の私への投票者のほとんどが、私の知らない人です。多分、その大方は、地域のしがらみや、政党のしがらみ、団体にしがらみなどから自由や人々であったかと思います。純粋に私のこれまでの議員としての活動を評価してくれる人、あるいは、これからの私の議員としての活動に大きな期待をかけてくれている人であろうかと思っています。

私への一票一票は、他のどの当選者の一票よりも重い一票であると自負しています。これまでの4年間以上にこれからの議員活動は、誰もがともに、幸せに暮らせる笛吹市を実現していくために、精一杯頑張っていく所存であります。今後も皆さんの叱咤激励をよろしくお願いします。

とことん市民・野沢今朝幸の笛吹市議会レポート

主な議会活動

H24年度9月定例議会（9月3日～9月26日）

9月定例議会はいわゆる「決算議会」と言われ、今年も平成23年度の歳入歳出決算の認定が議案として提出された。一般会計には、多機能アリーナ関練の歳出＝1億3000万円実施経費が含まれており、多機能アリーナ建設に反対する立場から、その認定には不同意とした。

後日談となるわけだが、10月21日実施された市長選で、多機能アリーナ建設に暴走する荻野現市長が、多機能アリーナ凍結を表明して市長選に立候補した倉嶋清次氏に大敗した結果からすると、この1億3000万円という大きな歳出を含め、これまで多機能アリーナ建設に向けて使われた歳出はすべて全くムダだということになる。

◎代表質問

さて、今回の議会は9月の定例議会なので、会派の「代表質問」が許可されるということから、2人しかいない今回、私が代表質問に立った。

代表質問では、10月21日の市長選をにらんで、「市長選に臨む荻野市長に問う」として、以下2点、市長に知っておいていただきたく荻野市長の見解を問いただした。

1. 前回の公約は果たされたか。

荻野市長は前回の市長選の公約で、市政を執るうえでの「基本方針」として、「市民自治の拡充」と「行財政の健全化」を挙げた。2つの「基本方針」がそれぞれどのような形で果たされたのか、示していただきたい。

2. 今回の市長選の争点（市政の課題）は何だと考えるか。

荻野市長は今後4年間を考えたとき、何が今回の市長選で、争点とされる「市政の課題」であると考えるか、示していただきたい。また、荻野市長は「多機能アリーナ建設」を今回の市長選の争点として積極的に打ち出す用意はあるか、伺いたい。

1の質問の「市民自治の拡充」では、多機能アリーナの建設を問う「住民投票条例」に対し、荻野市長が不同意の意見を添えて議会に提出したことは、「市民自治の拡充」と真向から対立するものであり、それを否定するものではないか、と問いただした。荻野市長はこれに対し、市民が理解できるような形での答弁は何らできなかった。

また、「財政の健全化」についても、荻野市長の言うのは、現時点での「健全化」ばかりであり、市民の本当に知りたい今後5年後、10年後の「財政の健全化」にはほとんど触れようとはしなかった。言うまでもなく、問題は、国のアメ政策である「合併特例期限10年」の切れる平成26年以降である。とりわけ問題なのは、国から笛吹市に交付される「地方交付金」の減額であり、平成26年以降5年間で徐々に減額幅が大きくなり、平成30年には約年27億円の減額となる。これは笛吹市の一般会計歳入のほぼ1割になる大きな減額である。これにどのように対処していくのか、この重大な点への答弁も結局何も聞けなかった。

2の質問の「市長選の争点」であるが、荻野市長からは何一つ積極的にしようとする姿勢は示されず、議会を傍聴していた市民も、CATVを視聴していた市民（一宮町、御坂町、芦川町、八代町の一部に限られるが）一様につながりしたに違いない。そして、これまでにない市民の関心事となり、そして、大きな市民運動の対象となり、更に今後の市民生活に多大な影響を与えるであろう「多機能アリーナ」を今回の市長選の争点とすべきではないのか、という私の質問—圧倒的多数の市民が期待している質問—にも、荻野市長は全く応じようとはしなかった。「多機能アリーナ」という言葉を巧みに避け、これまでの荻野市長の施政方針である「選択と集中」で今後も乗り切っていくという、極めて抽象的な説明で、「争点」から逃げ切りを図った。

荻野市長にとって、今回の9月の定例議会は2期目最後の議会であったが、とうとう最後の最後まで、荻野市長は市民の声をまともに受け止め、真摯に答弁することはなかった。

グリーンレター ⑫

風に向かう“こいのぼり”を応援します

渡辺佳次

少年の頃を思い出しながら、いま感じている事を少し述べます。

私の少年期は、あの有名な「昭和 30 年代」です。日本が一丸となった東京オリンピックは 39 年です。今、思えば戦後の無邪気な時代だったのでしょう。

農業の機械化はまだでしたので、田植え、稲刈り、草取りなど手伝わされました。そんなに、苦にならなかったように思います。今のようにいろんな誘惑がなかったからでしょう。中学生の頃になると、農作業でかがみ曲がった腰を伸ばそうと顔を上げ、遠くの山際に目をやると、空や山の景色に腰の痛みも忘れるほどでした。「山がきれいだな」などと声を上げると手伝いに来ていた親戚のおばちゃんが「佳次も大人になったね」などと言い、少し照れたのを思い出します。

田植えや稲刈りなど多くの人足が要る時は、ご近所の「組」という人々による共同作業です。早朝から夕方まで、重労働ですが食事や合間のお茶など賑やかでした。時折、声をかけてくれる近所や親戚のおじさん、おばさんになんとも頼もしく親しみを感じます。少年はこんな事から大人の世界を覗きながら何か充実した安心感を覚えます。

当然、多くの道具も自前で作っていました。父はよく藁で縄を編み、隣のおばあさんが土蔵のなかで箆を織っていたのを憶えています。家じゅうの者が役割を分担しながら副産物も無駄にせずにご利用し最後は肥料にしていたように思います。化学肥料のない時代ですから、堆肥だけが頼りです。今に言う有機農業と持続可能循環型社会です。当の昔に、システムは完成していたと思います。

見習うべきは、先人の「自然」に対しての接し方とそれを生活のなかに取り入れた暮らし方です。少し前までは、当然のように長く伝わっていたように思えます。

八百万の神が棲むといわれ、鎮守の森を大事にし、道祖神、屋敷神、屋根には水神さんを、家内には太陽神や火の神を拝していました。これらの祭神は神に仕える人間として暮らしの「しつらい」でもありました。その暮らし方は、当たり前ですが日本の家屋と調和したものでした。十五夜に開放された縁側の団子とススキの穂ほど我々の心の琴線に触れるものはありません。また、縄が神社に飾られるのは、自然界を治める力の象徴だと知りました。「しめ縄」が神社からなくなるとは思いませんが、八百万神の数は大分減っているように思います。

もう一つ、緑についてです。上のような先人は「庭」も大切に育てました。一部に成金的なお庭もありますが、文字通り「家庭」とは「家」と「庭」とで成り立っています。庭は最も身近な自然です。四季を愛で、命を慈しむ教室です。しかし、現代の新興住宅地には、高級車はあっても、屋根に太陽光パネルは乗っていても、ほとんど緑や庭がありません。無論、いろいろな事情がありますから、是非を言うつもりはありません。でも、景色として貧しく悲しいです。人の歴史は地表の緑をはがしてきたとも言えます。罪滅ぼしにリニアドームの両側に巨木を植えて、ドームを隠すように JR 東海に注文です。日々の豊かさには身近な緑がかかせません。先日、多摩市聖ヶ丘の団地を訪れる機会がありました。日本かと思うほどのみごと

な緑の景観でした。住環境の手本になると思います。

景観といえば富士山だけでは困ります。

太陽光発電を載せた片流れ屋根をイメージすると、童謡「こいのぼり」に出てくる“薨”という言葉は死語になるように思います。薨という文字は夢に似ています。もちろん、瓦屋根にだけこだわるものでありません。

肥田舜太郎医師と映画上映会&講演会に参加して（9. 23）

～映画『核の傷』と肥田さんの講演『3. 11以降を生きる』

霜田輝子

原子爆弾による「被爆」とレントゲンの「被曝」で字が違うことを初めて知りました。みな同じ被爆だと思っていました。政府は原爆であろうが、原発であろうが、被爆者は存在しても被曝者は存在しないものとしていることがよくわかります。

なぜなのか、それはすべて「金」です。国が被曝者への補償額を抑えたいからです。「核の傷」の映画の最後にこんなナレーションがあります。『なぜ政府は米政府と結託して原爆による死亡者の数を隠そうとしたのでしょうか。被曝者の認定は国の賠償責任にもつながる問題だったからでしょう。戦後67年たった今も状況が何も変わっていないということです。』

肥田医師の講演～原爆のこと

肥田医師は1945年軍医として広島陸軍病院勤務、8月6日は広島から6キロ北の戸坂村へ往診に行っていた。そのため、原爆による即死は免れた。そのかわり逃げてきた被曝者の救急医療を行うことになる。市内で即死を免れた者も、火傷、怪我に加えて瞼・鼻・肛門・陰部からも出血、頭の毛が全部抜け落ち急性放射能症で死んでいった。

1945年9月1日、アメリカ連合軍総司令官ダグラス・マッカーサーは厚木空港に降り立つと同時に日本国民に占領方針を発表し、その中で原爆被害は米軍の軍事機密であり、被曝者は被害の事実について一切しゃべってはならない、医師、学者は被害の調査・研究は行ってはならない、違反者は重罪に処す、を宣言。

アメリカが放射線被害のための広島と長崎に設立した医療機関「ABCC」は、内部被曝は微量で人体には無害であると宣伝し、投下後市内に入った被曝者は診察せずにその場から追い出した。「ABCC」に入院させられた被曝者に治療は一切行われず、いろいろな検査をするのみ、死ぬと全部解剖して切り刻み、脳から内臓から瓶の中に消毒液を入れて本国へ運ぶ。今この元「ABCC」を訪れる修学旅行生たちは「アメリカがここで正義を行った、原爆被害者をこの施設だけが診察した」という講義を聞く。科学を名乗った権威のある集団が嘘をついているのです。

またなぜ原爆が投下されたのか、それはソ連に対する威嚇と人体実験だった。その証拠の

一つは落とした時間、広島市にいる人間が一番屋外に出ている時間が何時なのか毎日偵察して朝の8時15分が一番屋外にいることを確かめ、そして爆弾投下、そしてすぐにABCを設立、火傷ではなく放射線の病気でどれだけ死んでいるかを調べた。私はこれらの肥田医師の言葉を初めて知り、アメリカに対する見方が変わりました。

昔私の母はアメリカのおかげで日本が豊かになって、アメリカに占領されて良かったと言っていました。確かにソ連に占領されていたら今の豊かな日本はなかったと思います。でもアメリカを信頼することは心情的、人道的にできなくなりました。真実をアメリカが公表しない限り・・・。

肥田医師の講演～内部被曝の脅威

顕微鏡でも見えない放射線の粒が体内に入った場合の方が怖い、医者に行っても放射線の影響だって事は絶対わからない、調べる方法がない、「だから同じ症状がこれだけの人たちに起こった」という数で話をするしかない。

アメリカ全土で乳がんの発生率を調べたところ、1950年以降40年間で2倍になっていた。アメリカの州の下の群の統計を調べたら、増えた所と横ばいの所そして減っている所もある。増えた群に共通するものを調べたら、軍用、大学にあるものを含めて“原子炉”のあるところから100マイル（約160km）以内にあることだった。そこにあって稼働しているだけで事故もないのにガンが増えているのです。人間の命とひきかえに稼働を続ける原子力発電所は人間のための物とは言えない。

日本国内のコンパスをあてて160kmを測ると日本全土（北海道北東部以外）すべてがコンパスに入ってしまう、日本に安全な場所はない。また、福島原発からの放射線は3月15日の大量放出からずっと続いていてすでに日本列島の隅々まで飛散していると推定される。微量でも危険な放射線の内部被曝のことを思うと原発を廃炉にして放射線を完全に止めない限り、ホットスポットはどこに現れても不思議はない。さらに、福島原発は広島・長崎のプルトニウムを混ぜたプルサーマルを使用しています。ゆえに広島・長崎に生じたと同じ障害が起こってくるだろう。

すでに福島、名古屋、京都、大阪、佐賀、福岡でも子どもの下痢や鼻血がだんだん増加しているとの情報が伝えられている。人間は放射能を安全に操作することはできないので、原発も核兵器もなくして「安全な地球に住む」ということしかない。

3. 11以降を生き残るための7箇条

- ①内部被曝は避けられないと腹を決める
- ②生まれ持った免疫力を保つ努力をする
- ③一番大事なものは早寝早起き
- ④毎日3回、規則正しく食事する
- ⑤腸から栄養が吸収されるよう、良く噛んで食べる
- ⑥身体に悪いといわれていることはやらない
- ⑦あなたの命は世界でたったひとつの大事な命、自分を大切に生きる

(肥田舜太郎)

いつもお地藏様をお願いしています。原発がなくなるまで大きな災害はきませんようにと・・・

去る9月30日、甲府でリニア計画に反対する沿線住民の交流集会が開かれ、東京、神奈川、山梨、長野、岐阜をはじめ、沿線各地から多くのひとが集まった。当日は午前中に山梨県内のリニア実験線延伸工事現場を視察、昼過ぎに集会の会場へと移った。午前の視察では予想を上回る約80名が参加、午後の交流集会では172名が集る。台風が接近する中での久々の反リニア集会であった。

繰り返すまでもなく、リニア中央新幹線計画は、南アルプスの自然破壊、トンネル掘削にともなうさまざまな問題、そして膨大な電力消費、電磁波の被害などさまざまな懸念を抱え、指摘されてきたが、昨年5月、震災と原発事故で国民が大きく動揺しているなか、この整備計画は半ば強引に決定された。そして現在は環境アセスメントの手続きが進められている。今回の集会にはこのアセスに意見書を提出した人も多く参加しているはずだ。

午前中の現場視察では参加者からさまざまな声が上がったようだ。花鳥山展望台から見ると、トンネルを出たあとの高架橋の工事が想像以上に進んでいることがわかる。「これは実験線の延伸と言いつつ、事実上、営業線の工事ではないか?」、また「高架橋の真下に民家が立ち並ぶが、日照、騒音など住環境の問題は?」など、ため息と疑問の連続だったようだ。目の前の事実はずでに語っている。

午後の集会では、まず、各県の現地からのレポート。「リニア新幹線を考える東京・神奈川連絡会」の天野捷一さん、浅香きみ江さんから始まり、山梨から「みどり・山梨」の野沢今朝幸さん、石原英次さん、富士川町の田中真由美さん、長野から「飯田リニアを考える会」の片桐晴夫さん、大鹿村の河本明代さん、岐阜からJR東海労の荻野隆一さんへとレポートは続いた。それぞれの地域は、今後反対運動の象徴的な核となるかもしれない地域である。レポートを受けてシンポジウムも行われ、報告者の天野さん、野沢今朝幸さんに加え、岐阜・中津川から野田契子さん、長野・下伊那から地質学の松島信幸さんら4人のパネラーと「リニア・市民ネット」代表の川村晃生さんの司会で、これからの取り組みの方向性について意見を出し合った。

南アの地質の脆さとトンネルの危険性について、また岐阜南部のウラン鉱床のことなど地質・自然にかかわる話から工事による生活環境の侵害のことまで実に多岐にわたる話が続いた。そのなかで、今後の取り組みのヒントになりそうな話として、山梨の工事現場のレポートが示唆に富むと思う。それは、具体的な運動はまだ成り立っていない、しかし、リニアは「夢の」と言われてきたが、工事が進んできたところでは、どんどんその夢が覚めてきて、逆に疑問の声が出てきている、という内容の話だった。湧水の枯渇、日照権、騒音、さまざまなことが目の前に現れてきたのである。「住民」ならではの切実な疑問だ。

さらにシンポジウムでは、今後の方向性として、すそ野を広げる運動のかたちと政治への働きかけ方に集中して意見が出された。いつものことながら、時間が押し迫り、議論までには至らなかったが、運動のかたちとしては、沿線の団体のネットワークを立ち上げること、その新たなネットワークを基盤に全国的な運動にしていきたい、その中で、政治への働きかけを模索していく、というおおざっぱではあるが、今後の方向性が示され、確認された。最後に「リニア新幹線はいらない」甲府アピールを採択して閉会、外は風雨がかなり強まっていたが、集会の会場は最後まで熱気に包まれていた。

その後のこと

10月13日に東京・神奈川、山梨、長野、岐阜の4地域の代表が集まり、新しい組織名と当面の活動について話し合われた。新組織名は「リニア新幹線沿線住民ネットワーク」。当面の活動は、統一行動として、署名活動と国会議員への働きかけ、統一リーフレットを作成する、1月に新組織の立ち上げ集会を、脱原発運動と連携を取りながら、神奈川・相模原でおこなう。各地域では、月一回の参加団体による何らかの活動をおこなう、などが決められた。そして、みどり・山梨では新しい組織の立ち上げにあたり、県内での住民交流会などを考えている。・・・さて、何と云ったらよいのか、今までのリニア・市民ネットとどう違うのか？その関係は？また、各地の住民団体と代表者会議？の関係は緩いのか、強いのか、今一つかたちのイメージが湧いてこない。

コメント

開発に反対する運動は、要するに、資本の自由に対して、こちら側の「生」の自由を対峙させる運動だ。こちら側とは資本の自由によって切り捨てられ、犠牲にされる者のことである。今日、世界中で反貧困の直接行動が起こっているが、そこにある対峙関係と基本的には同じ。そして、リニアについても同じことが言える。しかし、対峙は出発点であるが、だからと言って運動がうまくいくわけではない。

他方で開発に反対する運動には、自然保護、持続可能な社会、脱経済成長などさまざまな「知」による高みからの啓蒙的な立ち位置もあるが、無視されるか、場合によっては反感をもたれる。特に、貧困層からだ。それはそもそもこれらの「知」が矛盾や錯綜を抱えていることにも起因する。

「リニア・市民ネット」の今までの活動も、そこでの「知」は極めて貴重なものであったし、今でもそうだ。しかし、運動が社会に根を下ろしたとは言い難いし、それゆえヘゲモニーをとる見せ場もなかった。しかし、まったく成果がなかったわけではない。2年間にわたる沿線シンポジウムの成果が今回の住民集会なのだ。

さてこれからのことであるが、運動の社会的基盤は資本の自由＝暴力性に対峙する私の自由＝「生」への欲求である。この欲求は何も反原発だけではない、この欲求は社会のいたるところで現れている。この社会的基盤にどのように根を下ろすことが出来るか、難問であるが、運動の今後はここにかかっていると思う。「知」よりも、自由への欲求でつながるのだ。そして、リニアにおけるこの欲求は未だ不確かだが、今後建設工事が進むにつれ、否応なく、自覚されてくるだろう。ただし、地域内においては住民間の対立も想定の内に入ってくる。

編集後記

◇野沢さん、当選おめでとうございます。一期目の活動が市民の皆さんに高く評価されたようです。選挙中はなかなか応援できませんでしたが、最後の日、選挙カーで芦川を回った時、家から飛び出てきたおばあちゃん、おじいちゃんの笑顔がとても印象的でした。◇それにしても国政はとてもヒドイことになってきた。寒気すらする。意図的に「生活」をスポイルし、「維新」をくり返し報道するマスコミの姿はナチスのそれとそっくりだ。どうあっても自公民・維新の右派翼賛体制にもっていきたいのか。対して、脱原発派の統一連合が出来れば、象徴的で、だからこそ浮動票が動くのに、どうやら実現できないようだ。このままでは投票率が下がり、脱原発の小党はどこも苦戦することになりそうだぞ。わかっておるのか！ (M・A)